
セメラル

lonely rat

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セメラル

【Nコード】

N1889M

【作者名】

lonely rat

【あらすじ】

基本ShortShortでやっていこうと思っています。つまり短編集。

楽十と雀の合作です。二人ともそれぞれに別に執筆もしているのです。そっちも覗いてみてください。

基本なんでも有り。二人ともそれぞれ、好き勝手に思いついたモノを置いてみようってことです。

興味のある方は是非見てください！！

リドル（前書き）

これは楽十が執筆した作品です。なんか短編といっておきながら、さっそく物語が長くなるような気が…

ファンタジーです。童話とか…そんなイメージ？

リドル

『そうだ、ちょっと暇だから、ある人物の不幸な話を聞かせてあげよう。』

その人は手元にある本から目を上げると、私に目を向けたの。
それから、そっと口を開きました。

数ある中の、平凡なある一日のことだった。

僕は、父さんと母さんと妹と、四人で山のふもとの木の小屋に住んでいたんだ。山から少し北に行けば、それなりに大きな町もある。山には食料も豊富だったし、木も生い茂っていた。

町に住んで居ないのは、父さんが木こりだからだ。

別に珍しいことじゃない。

その日はいつもの通り、僕と妹は父さんを手伝うために、父さんについて山に登った。やけに野鳥の声が騒がしく耳が痛いし、寝不足のせいか頭もくらくらするし、父さんと妹はそれに気づきもせず雑談しながら先に行ってしまう。今までで最悪の登山だったもので、今も良く印象に残っている。

午前、その日の分の木を切り一仕事し終ったとき、いつものように、母さんが弁当を持って走ってきたんだ。母さんは慌てん坊だから、いつも引つかかる木の根に、今日も引っかった。

お腹も減ったし、丁度近くに花畑があったからそこで皆で弁当を食べることになったんだ。

パンをさあ食べようと父さんが取り出したとき、母さんがジャムを忘れたのに気づいたんだ。母さんは慌てん坊だからこんなことはしょっちゅうだ。

こんなときはいつも、身軽で一番足の速い僕が家までさっと駆けてって、ジャムを取ってきてあげるんだ。

気分は少し悪かったけど、母さんのサンドウィッチを一個食べたらしになったので、父さんのためにジャムを取りに花畑を後にしたんだ。

でも、そのときはそのサンドウィッチが、母さんの最後の手料理になるとは思いもしなかったんだ。

意識したつもりは無かったのに、何故か足が前へ前へと急いで動く。今までに無いほど走ったと思う。動悸も激しくなり、お腹も痛かったのに、何故か足を止める気にはならなかったんだ。

そのせいで今までで最短で、家に着いたんだ。ジャムを急いで取ってドアを押し開け、さあ皆が待っていると、山の方へ振り返ったんだ。

そしたら何が見えたと思う？

実は何にも見えなかったんだ。可笑しいだろう？目はちゃんと開けてるのに、目の前が真っ黒だったんだ。

そいつは、想像もつかない大きさの黒い壁だった。

そいつは音も無く現れたんだ。

上を見ても、その壁は空を突抜けるように続いている。

横を見ても、僕の目が見たことも無いような場所へと、永遠と繋がっていきそう。

下を見ても、地面と繋がっているんじゃないかと、地面を飲み込んで

でるみたいに見える。

僕はびっくりして、手に持ったジャムを取り落としてしまった。そしたらそれはころころ転がって、その黒い壁のほうへ行ってしまったんだ。

僕が気づいてとっさに手を伸ばしたときには、もう遅かった。

ジャムのビンは、黒い壁に飲み込まれるように、消えていった。まるで、水の中に吸い込まれるように、そのところから波紋が広がっていった。

え？ そのあと僕の家族はどうなったのかって？ そんなの僕が聞きたいさ。

だって、皆が居た花畑は、黒い壁に消えた山の中にあっただよ。

？ ？ ？

目を開くと、窓から差し込む鋭い光が容赦なく降り注いだ。それに顔を顰めながらも、身体を起こす。

正直言って、目覚めはいい方ではない。低血圧気味なのだ。

それを差し引いても、今日の朝はあまり清々しいものでもなかった。

随分昔の……夢を見ていた気がする。家族がいた頃の……しかも、それを誰かに語っていなかったか？ いったい誰にあんな

ことを話していたのだろう……

溜息が出た。どうせ夢の話だ。気にすることじゃない。

その後は、そんな夢なんか見なかったような気分で、僕は欠伸をして身体を思いっきり伸ばすと、ベットから降り、自室のドアをくぐった。

僕の家の傍には、今も黒い壁が聳え立っている。

そいつは、雨が来たって、嵐が来たって、びくともせず何年たっても消える気配が無かった。

あれの正体は今だ不明。

何である日あそこに現れたのか、何のせいで急に現れたのか。

家族が帰ってくるような奇跡も無く、僕は結局気ままに一人で暮らしていた。

金は山の中にあるものを勝手に取って、売れば、一人分の食費ぐらいなら簡単にやりくりできた。案外、高い薬草が生える地域だったようだ。それに、あの事件があった直後は、父さんの友人が世話をしてくれた。

今日もまた金になる薬草を採りに、例の山に朝から来ていた。

木々の間をくぐって、鳥の歌にも耳も貸さず、僕は歩いていった。

やがて視界は開け、小さな窪地へ出る。そこは大した薬草も無いので、横切るだけ。

今日の目的は、花畑にある。あそこに沢山生えている月見草。ちょうど満月も近く、この次期質屋や、薬屋に持っていくと高値で売れるのだ。

今日の前にある、そびえたつ大木を右に曲がり、朝日を反射させる湖を迂回して、やっと例の花畑につく。

色とりどりの花が群生し、緑の絨毯の上に、月見草の白いつぼみ

も転々と転がっていた。風が吹けば花びらが舞い、朝日の光は花々を一層神秘的に映し出す手伝いをしていた。

ただ、そんな美しい光景も、少し目線をあげると台無しだった。

丁度花畑の半分から黒々とした壁が立ちふさがっていた。それを背景として花々を見ると、神秘的に見えていたものも、急に、食人花にも負けないくらいどす黒く感じてしまうのだから不思議だ。

あの壁の向こうにはまだ、家族が弁当を樂しげに広げているのだろうか。……そんなはずは無いだろう。それは僕が感じたただの錯覚。願望。

もう一度ジャムを持ってあの壁をつきぬけたら、皆が笑顔で迎えてくれるんじゃないだろうか。母さんが申し訳無さそうに微笑んで、父さんが良くやったと頭を撫でてくれて、妹がそれを見て軽快に笑って。そんな光景が広がっているんじゃないかという、願望から生まれた錯覚。

花がどす黒く思えるのも、きっとそのせいだ。きっと本物は黒い壁が背景でもとても綺麗なはず。

「まいったな……」

こんなことを考えている自分に溜息を吐く。夢を見たせいで感傷的にでも成ったのだろう。

馬鹿らしい。いまさら彼らがもどってくるはず無いんだ。そんなの自分で証明済みだろう。関係ない。今の僕には関係ない。過去に埋もれては、身動きがとりにくくなるだけ。理不尽に失ったものは今だ失ったまま。いくら僕が悔しがっても神様はそれを決して返してくれない。なら、苦しみたくない。だからその思いを忘れよう。

その思いを噛み締め、再確認しながら一步一步、足を踏み出す。目的の花が群生している場所に向かって。月見草が集まっている所は、黒い壁と繋がっている。だから僕は黒い壁に向かって歩く。

ふとその中、月見草のつぼみの咲き乱れる中に人影を見た。また
＜迷人＞だろうか？

「君は……」

そこに眠っていたのは、果たして誰だったのだろうか。

翠の上に白い蕾は咲き乱れ、眠る彼女の栗毛の髪は扇状に広がり
風がそれを弄ぶ。彼女を包む若草に似た翠の瞳は未だまぶたに包ま
れたまま。

立ち尽くした僕を強く押す風は、そのまま僕を通過して、音も無
く黒々とした壁に吸い込まれる。いつもはそれでも微動だにしない
壁が、そのときだけは波打ったように見えた。

それは何かの合図だったのか。そこから物語りは動き出した。

「リドル？」

リドル2

ここはどこだろう。

何処か懐かしい木の香り、やさしい光の差し込む部屋。気づけば私はその暖かいベットで横になっていた。知らない場所に困惑しながら、少し首を回した。そして目に入った、花瓶の中の月見草の花。

ああ。思い出した。あの光景だけ。

頭に浮かんだのは、月見草の咲き乱れる花畑。

でも、思い出せない。

その続きが、その前が。その光景を見たことは覚えている。その後私はどうしたのだっけ？

「私、……あれ……？」

自分が見つめる自分の手が、目が霞むせいかわく穢気に見える。

そのまま硬直していた少女の耳に、この部屋に近づいてくる足音が聞こえてくる。その足音はこのドアの前で止まったかと思うと、ドアをノックした。返事が出来ないでいる少女に構わず、しばらくするとドアを開けた。

「あ……。起きたんですね」

その人は寝てるとばかり思っていた私が上半身を起こしているのを見て、ちょっとだけ驚いたみたいだった。

「……………だれ……？」

「……………え…、と。ん。その話はちよつと込み入ったことになりそうなんで、その前に、これ。お腹空いているのでしょうか？」

優しそうな顔の男の人は、その顔をもっと優しくにして笑って手に持ったお盆を私に差し出してきた。思考もまともに整理できない

まま、反射的にそれを受け取った。

「パン……と、ジャ、ム？」

「うん。ジャム。ところで君の名前は？僕は……」

「名前!？」

「あ、はい。名前です」

急に迫力を増した私の声に、その人は驚いて半歩私から離れた。私も自分に驚いた。さっきまで凍っていたように動かなかった思考と心が、雪解けが訪れたように解けて、活動を始める。

心は溶けて流れ出し、そして、愕然とした。

「名前……：分かりません。覚えて、ない、みたい……」

「あれ、記憶喪失なんですか？呼び名が無いと困りますね……あ！その人はそれを聞くと、それほど驚かず、困ったように笑う。そして少し下を向いて考え込んだ後、パツと顔を上げて、妙案でも思いついたのか嬉しそうに言った。

「それじゃ、仕方ないんで、妹の名前を貸して上げますよ。ああ、安心してください。妹はずっと遠くにいるんで、ちょっと名前借りたって、困ったことにはなりませんよ」

「妹の名前……？」

「『リドル』というんです。気に入りましたか？」

その言葉と笑顔に、私は不思議と心が安心するのを感じていた。そしてコクと私が頷くと、さっきよりさらに本当に嬉しそうに笑った。

よく、笑う人だな…。

「ところで、『リドル』。ジャム食べないんですか？せっかく急いで持ってきたのに」

？
？
？

「ふ、フォルア……トー？ ウイト……エスト……？？」

嬉しそうに薦められる食事を食べた後、告げられた、謎の音に私の舌は追いつけなかった。どうしてもその音を復唱しようとする舌を嚙んでしまう。

「そう。フォルトゥーナ・ワイトレア・エスト。それが僕の名前です。長い名前でしょう。両親は何が好きでこんな名前付けたのだから溜息混じりに言われた言葉にこけそうになる。あの呪文みたいな言葉はこの青年の名前だったのか。だがいちいちフォルア……じゃなく、ファール、ああ！ 言いにくい！ ともかく、こんな嚙みそうな名前毎回呼んでたら早口言葉が得意になってしまう。」

「発音しにくいね……簡単にフォルアって呼んでいい？」

「え………良いけど、フォルアか……」

『フォルア』は急にニックネームを付けられたことが予想外だったのか、目が驚いていた。

その様子には私は少しだけ笑ってから、さっきからずっと聞きたかったことを聞くために口を開いた。

「フォルア。ところで……あの……ここどこ……？」

自分で聞いてて変な質問だということは分かるのだが、どうしても聞かずには居られない。ここはどこで、私はどうすれば良いのだろう。これからの身の上が心配でたまらない。記憶喪失とは、こういうものなのか。

「ああ。そうでした。説明しないと分からないでしょうね。まず、ここは僕の家なんです。山にあるんでいろいろ不便が多いんですよー」

その言葉を聞きながら、ふと窓の外を見る。

なるほど。道理で空気も澄んでいて、木が多いわけだ。ひとの町にあるような雑音が無い。

「この家からもう少し高い所に、珍しい花が群生しているところがあるんですが、あなたはそこで倒れていたんです。」

『黒い壁』の、すぐ横に」

「黒い、壁？花畑の横にあるの？」

「ええ。まあその話は追々。あなたは、『迷い人』と呼ばれる人たちを見たことがありますか？」

世界暦807年 最北の地に黒い壁が出現した。

観測されなかった異常事態。構成物質は不明。

大きさは計り知れなく、顔を上げても端が見えない。空の彼方までの高さがあると推測される。

横の端も未だ確認されておらず、大陸の端の海の向こうまで続いている。

その向こうにあった住宅地や、町に居たはずの人々は、未だ確認されず。生死不明。

黒い壁に飲み込まれた人数、確認されているだけで100万。

わかっていること。

正体不明の生命体が稀にその壁から落ちてくる。

世界暦808年 羽をもったトカゲのような巨大生物が黒い壁から落ちてくる所を農夫と少年が目撃。

それから、元々この地に居なかったはずの生物の目撃情報が絶えない。

中には獣も多かったが、人語を話す、人と形態の似た生命体もあり、彼らは一貫してこう言った

「異世界から来た」と。

時に奇怪な姿を、稀に我らと似通った姿をした、その者たちを我らはこう呼ぶことにした。

『迷い人』と。

黒い壁に飲み込まれた100万の人々はその中には居なかった。

迷い人は、彼らを見つけ出すための手がかりになるかもしれない。未だ迷い人の正体は明かされておらず、消えた人々も帰ってこな

い。

果たして、迷い人は本当に異世界から現れたのか。何故黒い壁が現れたのか、消えた人々はどこへ行ったのか。

今日も数々の研究者により研究が進められている。

しかし未だ、証拠も無く、一つも解明されては居ない。

『リリス大陸全歴史記録書より 第13章』

フォラは人差し指を私に向けて、ビシッと突き刺した。

「で、君はその迷い人だ。そして、君が倒れていた花畑にある壁が、その黒い壁」

「ええ!!?」

「あ、ついでに僕がその記述にあった巨大トカゲを見た農夫と少年の、少年です」

「え!?!?、嘘、ええ!!?」

『迷い人』って知っている?という質問と一緒に差し出された深緑の分厚い本、に書かれている文字を、何処か童話を見るような目で見ていたのに、その次に言われた事実に自分の心臓は大げさに飛び上がる。

し、心臓に悪い……。

「ちなみに、今は世界暦814年です。研究も結構進んでるんですが、なにせ不明瞭な点多すぎて……」

「……………え…?はあ」

驚きすぎてフリーズしてしまった私を見て、フォラがすこし苦笑いする。そんな、簡単に何気なく、しょうげきの事実を告げないで欲しい。なんで、そんなのんびりとしてるのフォラわっ!こっちが驚いているのが馬鹿みたいじゃないか。てか、え?異世界人?ええ?

ふと、部屋にある姿見を見てみても、私とフォラも、同じ人種の人間に見えた。変わっている所なんてどこにも無い。話す言葉も同じだ。なぜだろう。

「まだ、驚いてますね。安心して、君のような迷い人の身の上は政

府が保障しますから」

そんなのんびり笑われても、こっちは落ち着きません。

「しばらくは、僕の家で預かる契約なんで、よろしく御願いますね」

？ ？ ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1889m/>

セメラル

2010年11月25日17時01分発行